

氏名	まつい かずみ 松井 一美
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲術第21号
学位授与の日付	平成21年3月31日
学位授与の要件	学位規程第5条
学位論文の題目	「ーている」の意味とロシア語のアスペクト ーロシア語話者の「ーている」習得からー
審査委員	主査 今泉 喜一 副査 金田一秀穂 副査 池上 嘉彦

学位論文の要旨

本研究は、ロシア語アスペクト論の視点からアスペクトとはいかなるものかを定義し、現代日本語のアスペクトとされている「ーている」の意味、用法及びそれらが決定されるメカニズムを明らかにすることを目的とする。さらに、ロシア語母語話者における「ーている」習得についてロシア語のアスペクトとの対照の観点から独自の仮説を立て、実験調査により仮説の検証を行った。

「座っている」は日本語学上の分類では「結果の状態」と言われているが、ロシア語母語話者にとって「座っている」は、いわゆる動作の進行中（「動作の継続」と認識されているように思われる。「ーている」の用法のうち、「結果の状態」用法は「動作の継続」用法より習得が困難であるとされているが、「結果の状態」用法の中にも習得が困難なもの、習得が容易であるものがある。

アスペクト形式としての「ーている」は日本語学習者にとって習得困難な項目としてしばしば取り上げられ、これまで多くの研究が行われてきた。「ーている」の習得に関する研究では、「結果の状態」用法と「動作の継続」用法のうちいずれが習得困難かという点に焦点が当てられ、ほぼ全ての先行研究で、「結果の状態」の方が「動作の継続」より習得が困難であるという結論に至っている。先行研究では、専ら日本語学上の観点からのみ「ーている」の用法を分類し、その習得の難しさについて論じているが、本論文では、日本語学上の分類のみを基準に論じることの問題点を指摘し、「ーている」とロシア語のアスペクトとの対照の観点から「ロシア語母語話者にとっては、日本語学上の分類にかかわらず、ロシア語で表現したときに、不完了体動詞一語で表すことのできる『ーている』は習得しやすく、不完了体動詞一語で表すことが

できない『一ている』は習得が難しい。」という仮説を立て、4種の実験調査を実施し仮説に沿う結論を得た。

また調査の結果、「一ている」の結果用法の中でも「経路を含んだいい方で存在を表す」用法は、特に習得が難しいということが明らかとなった。「経路を含んだいい方で存在を表す」用法の多くは、他の言語では存在を表す動詞のみで表現されることが多いため習得が困難であると思われる。

現代日本語のアスペクト形式の一つとされる「一ている」の本格的な研究は金田一春彦（1950）の「国語動詞の一分類」から始まった。第二章では、金田一（1950）から現在にいたるまでの日本語アスペクト研究の動向を概観し、特にロシア語アスペクト論が基になっていると思われる「スル・シテイル」の形態論的対立を日本語のアスペクトであると主張する見解の問題点を、ロシア語アスペクト論からの検証により指摘した。本論文では「スル・シテイル」の形態論的対立を日本語のアスペクトとは考えない見解を支持する。

また、現代日本語アスペクト研究におけるアスペクトの定義に関する問題について述べた。現代日本語アスペクト研究においては、異なるアスペクト観が、その違いを意識されることなく同一平面上で論じられているように思われる。質的に異なるものを同一平面上で論じることには意義を見いだすのは困難である。議論に先立ち、どのようなアスペクト観に立つのかを明確にしておくことが重要であると考えられる。

本論文ではアスペクトを「アスペクトは、話者が当該の事態を概念上の時間軸との関連で、どう捉えているかを表す文法形式である」と定義し、〈事態の局面を指示する〉ものはアスペクトとは区別して考えることにした。また、本論文では「どう捉えているか」の内実を、認知言語学でいう〈construal（事態把握）〉と共通のものであると考える。同じ〈事態〉であっても、話者はそれを受動態で表現するか、能動態で表現するかを自らが主体的に選び言語化する。これと同様にロシア語においては、完了体動詞を用いるか不完了体動詞を用いるかを話者が主体的に選択し言語化する。ある言語において、受動態と能動態という文法カテゴリーが存在するように、ロシア語においては、完了体と不完了体という文法カテゴリーが存在する。これがロシア語における〈アスペクト〉である。完了体は「動作をはっきりと明確にとらえる」ということを示し、不完了体は「ものごとを漠然と、曖昧な形にとらえる」ということを示す。〈アスペクト〉をこのように考えると現代日本語においては、このような文法カテゴリーは存在しないと言える。

現代日本語においてはロシア語のように、動詞全体を包む文法的範疇として確立したアスペクト体系は存在しないが、事態を概念上の時間軸との関連で話者がどう捉えているかを示す形式は存在する。その一つが「一ている」である。この意味から本論文では、「一ている」は最も文法化の進んだアスペクト形式であると位置づける。

本論文では「一ている」は、話者が当該の事態を状態として捉えて表す形式である

と考え、「状態相」と呼ぶことにした。「一ている」は金田一（1950）以来、状態相の一つとして考えられてきており、これまでも多くの研究者が「一ている」は状態を表す形式であると述べている。そこで本論文では、『一ている』は、話者が事態を概念上の時間軸の上で基準時にその動詞が実現する意味を担い存在することを状態として捉えて表す形式である」と規定した。ここでいう「状態」とは、当該の動詞の始まりも終わりも意識せず、基準時点に動詞の意味素が実現し存在していることを表し、無変化的、均質的特徴を持つ。本論文では、状態相「一ている」の意味的特徴として〈無変化性〉と〈均質性〉を挙げる。

「一ている」の主な用法は「動作の継続」と「結果の状態」であった。本論文では、「一ている」を〈状態相〉と規定し、「動作の継続」を「活動」、「結果の状態」を「結果」と呼ぶ。また、「繰り返し」用法を「活動」の派生的用法とし、「経験」、「単なる状態」用法を「結果」の派生的用法とする。「一ている」が「活動」及び「結果」のうちいずれの用法になるのかは、文（談話）の中で当該の動詞が〈限界性〉であるか〈非限界性〉であるかにより決まる。〈限界性〉とは、当該の動詞が終了限界をもち、動詞の意味が実現するために終了点に達する必要がある動詞のことである。つまり、終了点を内包した動詞のことである。〈非限界性〉とは、当該の動詞が終了限界をもたず、動詞の意味が実現するために終了点に達する必要がなく、開始によって意味が実現したと認識できる動詞のことである。当該の動詞が〈限界性〉であるか、〈非限界性〉であるかは、文あるいは談話の中で決定されると考え、動詞に固有の性質とは考えない。

以上をまとめると下の表のようになる。

相	動詞	意味・用法	派生的意味・用法
状態相	〈非限界性〉 (文・談話の中で当該の動詞が非限界的な動詞として振る舞う時)	①活動	③繰り返し
	〈限界性〉 (文・談話の中で当該の動詞が限界をもつ動詞として振る舞う時)	②結果	④経験 ⑤単なる状態

審査結果の要旨

〔論文の内容〕 日本語のアスペクト形式「一ている」は、学習者の母語と関係なく、動作の進行中を表すこととしては習得されやすく、結果の状態を表すこととしては習得されにくい、というのが日本語教育学界での共通認識である。しかし、論者は、①自らの教授経験から、ロシア語母語話者の場合にはそのような認識とは異なるロシア語固有のメカニズムが働いているものと考え、それを明らかにすることを志した。まず、②現代日本語アスペクト研究の現状を調査し、「スル・シテイル」の二項対立的捉え方の不備を指摘した。次に、③論者なりにアスペクトを定義し、「一ている」を「状態相」として捉えることを述べ、「一ている」と動詞の「限界性」「非限界性」との関係で表される意味とその用法について論じた。続いて、④ロシア語の完了体、不完了体で表されるアスペクトの性質を論じ、日本語の「一ている」との異同について論じた。さらに、⑤第二言語習得研究としての「一ている」習得に関する先行研究を調査している。

以上をふまえて、論者は⑥「日本語学上の分類にかかわらず、ロシア語で表現したときに、不完了体動詞一語で表すことのできる『一ている』は習得しやすく、不完了体動詞一語で表すことのできない『一ている』は習得が難しい」との仮説を立てた。そして、これを実証するためにロシア語母語話者を対象とする4回にわたる4種類のアンケート調査を実施した(⑥⑦⑧⑨)。⑩アンケート調査の結果とそれに関する考察から、論者は仮説は実証されたものと結論づけた。

〔論文の意義〕 ロシア語母語話者が日本語の「一ている」を学習する際に働く固有のメカニズムを明らかにしたことによって、日本語教育学界における上記の共通認識に対して修正を迫る新たな知見がもたらされた。ここにこの論文の意義が認められる。

〔論文の評価〕 日本語アスペクトの理論的扱いに関しては今後に期待するところがあるが、研究の着眼点も良く、調査・考察も妥当、導かれた結論も意義のあるものであり、高く評価できる。